

日本癌学会 JCA-CHAAO 賞 「FLT3 変異の発見と標的治療薬の研究」受賞に際しての 横田昇平先生による解説論文掲載について

みなさまご存じのとおり、血液内科学の横田昇平先生は、このほど、2020年度日本癌学会「JCA-CHAAO賞（Japanese Cancer Association-Chugai Academy for Advanced Oncology Award）」を名古屋大学の直江知樹名誉教授と清井仁教授とともに共同受賞されました。これを受けまして、本誌、京都府医科大学雑誌では、2021年（第130巻）の冒頭に横田先生による「FLT3 遺伝子変異の発見と新しい白血病治療薬の誕生」と題する解説論文を掲載します。

JCA-CHAAO賞は「新たな抗がん剤・治療法に関わる研究・開発を行い、日本のがん医療の発展に多大に貢献する成果物を創出した個人又はグループの功績を称え」ることを謳って2011年に創設された医学賞です。比較的新しい賞ではありますが、これまで錚々たる医学研究者の方が歴代受賞されています。例えば2014年に「PD-1抗体による癌免疫療法の発見」で受賞された京都大学の本庶佑特別教授がその後まもなくしてノーベル医学生理学賞を受賞されたことは耳目に新しいところかと思えます。

横田先生は大学院学生のころ手がけられた白血病幹細胞の研究をご自身の研究キャリアの第一歩とされています。その後ドイツ留学時に、それまでごく少数の症例でしかなしえなかった急性リンパ性白血病のクローン性解析や微小残存病変の検出を、免疫グロブリン遺伝子座やT細胞受容体遺伝子座の白血病クローン特異的な再構成を利用することで、理論的にはほぼすべての症例で可能なることを世界で初めて確立さ

れました（**Yokota et al, *Blood*, 77: 141, 1991.**）。

本学に帰国後、今度は急性骨髄性白血病におけるゲノムマーカーの探索に乗り出し、そこでFLT3という膜貫通型チロシンキナーゼのゲノム遺伝子にインプレームのまま遺伝子重複が生じるという（*FLT3-ITD*）、極めて特徴的なゲノム変異が高頻度に生じていることを世界に先駆けて発見されました。その後*FLT3*には点変異も生じることが名古屋大学グループによって示され、いずれも活性化変異であって、その制御による治療法開発へと結びついていた今回の共同受賞となりました。

急性白血病における*FLT3*遺伝子変異の研究は横田先生の研究グループによる1996年12月発表の論文（**Nakao, Yokota et al, *Leukemia*, 10: 1911, 1996.）に端を発しますが、現時点でこの論文の被引用数（SCOPUS）は1000に迫ります。またPubMedのデータベースによると、*FLT3*と*ITD*の両者の語を含む医学論文は横田先生のご発表の後1997年に初めて現れたものですが、以後現在までに2000論文を超え、いまだに増え続けています。このようにハイ・インパクトでかつ臨床の現場にじっさいに届く医学研究が本学研究者によって成し遂げられたことを、横田先生の総説論文を拝読しながら皆様とともに喜びあいたいと思います。**

2021年1月1日 記

編集委員会委員長 奥田 司